

生まれつき足のなえた人に対して行われたいやしのわざは、その人自身に救いをもたらしただけでなく、それを機に、ペテロとヨハネのもとに集まって来た人々にも救いを与える結果となりました。4 節に記されている通りです。「しかし、みことばを聞いた人々が大ぜい信じ、男の数が五千人ほどになった」。

ペテロの最初のメッセージの際には、三千人ほどの人が信じたとありますから、それから救われる人が毎日加えられ、この時には五千人ほどになったというのです。しかも、それは男性の数だけですから、彼らの妻子なども含めると、その数は倍以上であってもおかしくありません。またこの出来事は、宮で起こっていますから、その騒ぎは、当然すぐに祭司たちや宮の守衛長、またサドカイ人たちへと伝わったわけです。

1-3 節「彼らが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たちがやって来たが、2 この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、3 彼らに手をかけて捕らえた。そして翌日まで留置することにした。すでに夕方だったからである」。

ここに集まった祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たちは、宮で仕える人々ですから、当然、聖書に通じていました。ただ「サドカイ人」と聞いて、ピンと来る人もおられるかも知れませんが、彼らはパリサイ人とは違い、御使いの存在や死者の復活を信じていませんでした。「それでどうやって神様を信じていると言えるのか」と疑問に残るところですが、それでも彼らはイスラエルにおける指導的な立場にあったわけです。それ故に、彼らは（人間的な）力を持っていました。それを使ってペテロたちに手をかけ、捕らえたのです。

そして、翌日、民の指導者、長老、学者たちが、大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル、そのほか大祭司の一族とともにエルサレムに集まってきました。彼らは、ペテロたちを真ん中に立たせてこう尋問したのです。7 節「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか」。この質問にどこか聞き覚えはないですか？「何の権威によって」、指導者たちが主イエスにしたのと同じ問いです。

彼らは、ペテロとヨハネが、宮の門と宮の中で行っていたことに対して、「いったい誰の権威によってそのようなことをしたのか？」「誰がそれをして良いと許可を与えたのか」と問いました。そのように彼らはいやしの内容についてではなく、「だれの権威」とか「だれの名によって」と、権威にこだわったわけですが、それはなぜでしょうか？宮の権威、つまり、神の働きに関するすべてのことは、自分たちに責任がある。自分たちこそ、その権威を神から受けた者であると自負していたからです。事実、彼らには、ペテロとヨハネを捕らえるだけの力がありましたから、彼らがそのように考えていたとしてもおかしくありません。

それに対して、ペテロが答えます。8-10 節「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。『民の指導者たち、ならびに長老の方々。9 私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行った良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、10 皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです』」。

聖霊に満たされたペテロは、それまでと同じように、ここでも主イエスの十字架の死と復活について語りました。そして、ユダヤの指導者たちを指して、ここでも「イエスを十字架につけたのは、あなたがただ」というのです。「彼らこそ、主を十字架にかけて殺した張本人である」と。でも、神様は、その方を死者の中からよみがえらされた。そのイエスの御名、主イエスご自身が、この人を直したとペテロは証言するのです。

そして、この時も聖書を引用していいいます。11 節（詩篇 118 篇 22 節）「『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった』というのはこの方のことです」と。さらに続く 12 節では、「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」と、主イエスこそ約束のメシヤであると力強く証するのです。

この「あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった」とは、主ご自身も語っておられる重要なメシヤ預言の一つです（マル 12:10、ルカ 20:17）。ペテロも、その手紙（I ペテ 2:7）で引用しています。もしあなたがユダヤの指導者の一人であったなら、このペテロのことばを聞いて、どう思うでしょうか？心穏やかでいられたと思いますか？「あなたがたは、主イエスを十字架にかけて殺した。でも、あなたがたが捨てたその方こそ礎の石、神様の約束されたメシヤだ」と言われて、どう応答するのでしょうか？

これを聞いた指導者たちの反応は 13-14 節 です。「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。14 そればかりでなく、いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった」。

この時点では、指導者たちにはまだ余裕が見られます。というのも、彼らはペテロたちの大胆さを見、また彼らが無学な、普通の人であるのを知って驚きますが、その後の彼らのことばや行動からすると、まだ弟子たちに対してそこまで脅威を覚えていないようにも思えるからです。どちらかという、ペテロたちの大胆さといやしを前に、ただ驚き、呆気にとられているような感じだったのかも知れません。そういう意味で、「あなたがたが主を十字架につけた」というペテロのメッセージは、彼らの心には届いていなかったのでしょうか。

なぜそうだったのでしょか？続きを見ます。 15-18 節 「彼らはふたりに議会から退場するように命じ、そして互いに協議した。16 彼らは言った。『あの人たちをどうしよう。あの人たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全部に知れ渡っているから、われわれはそれを否定できない。17 しかし、これ以上民の間に広がらないために、今後だれにもこの名によって語ってはならないと、彼らをきびしく戒めよう。』18 そこで彼ら呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた」

彼らは、ペテロたちによって行われたしるし、そのこと自体は認めています。「そんなことは起こらなかった」と、否定はしていないのです。でも、だからといって、そこまでの出来事（奇蹟）を前に、彼らは神様の御心を求めようとはしません。むしろ、それがすでにエルサレムの住民全部に知れ渡っているので、それ以上、騒ぎが広がらないように、イエスの名によって語ることを禁じようとするのです。

この指導者たちのことばを聞いて、どう思いますか？おかしいとは思いませんか？40年間も歩いたことのない人が、自分たちの目の前でいやされた状態で立っているのです。そこには証人たちもいて、みなこのことのゆえに神様をあがめていました。にも関わらず、彼らの関心は、いやされた人や神様ご自身に対するものではなく、この騒ぎがさらに広がらないようにすることでした。つまり、彼らの関心は自分たちのこと、彼らがいかにその権威を保ち、現状の歩みを続けるかということだったのです。ですから、外側としては神様に仕えているようでした。でも、その心は、実は神様に向けられていなかったのです。

ですから、この時も彼ら自身の願いとしては、ペテロとヨハネを罰することでした。自分たちの権威、権力をもって、この騒ぎを鎮めることだったのです。でも、21 節に「人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったから」とあるように、彼らは民の暴動を恐れました。民が自分たちに対して反抗的になることを恐れたのです。人々がみなこのことのゆえに神様をあがめていたからです。その民の手前、手荒なことはできずに、この時は、仕方なく、ペテロたちを脅した上で彼らを釈放しました。

その時のペテロたちのことばを見ます。 19-20 節 「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません」。どうでしょうか？ペテロたちがこのように言い放ったことは、信仰者として当然のこととあなたは言いますか？相手は、一般人ではありません。ユダヤの指導者たち、最高議会（サンヘドリン）です。この時も、その力をもって自分たちを捕らえたその指導者たち、また主を十字架にかけて殺すよう、民を先導した人々です。彼らを前に、ペテロたちはこう言ったのです。

私はここに信仰者がみな聖霊に満たされる必要性を見ます。ペテロたちは、ペンテコステに聖霊を受けましたが、この時も聖霊に満たされていた。つまり、聖霊によって力を受けたので、ペテロはこのように証したのです。それは彼自身の正しさや力によるものではありません。聖霊によったのです。

「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません」とペテロがいうように、私たちをして、自分が実際に体験したことから来る確信は、それを人から聞く場合とは違います。「これは真実だ、本物だ」という確信が与えられたなら、それは簡単にはなくなりません。でも、状況によって、その確信が揺らがされることがあると思うのです。たとえば、この時のペテロたちのような場合がそうです。私たちは、自分よりも力のある者を前に、身の危険を感じるなら、自分の確信を曲げるという誘惑に合います。

でも、聖霊に満たされるなら、聖霊が主の証人となる力を与えて下さいます。語るべきことばを主が聖霊を通して与えて下さるのです。それが主のお約束です。皆さん、私たちもこの同じ主の御霊を受けています。私たち自身は、無学な、普通の人かも知れません（中には、教養のある方、特別な能力をお持ちの方もおられると思いますが…）。でも、主はご自分が神であられ、力のあるお方であるゆえに、ご自分に信頼する者のうちに働いて、御心を行わせて下さるのです。

ですから、学歴があるかどうか、特別な能力があるかどうかは、主の前では重要なことではありません。むしろ、主の前に、自分が罪ある者に過ぎないことを認め、でも、そんな私を救うために神様が遣わして下さった救い主イエスを信じるのが大切です。なぜなら、いくら学歴や能力があっても、私たちには自分のいのちを救うことができないからです。終わりの日、正しい審判者である神のさばきの前に、罪のない者、完全に正しい者として立てる人はひとりもいません。それゆえに神の救い主に救っていただく必要があるのです。

そして、その方こそ、ユダヤ人たちが、また私たちを含むすべての人が、十字架にかけて殺したイエス・キリスト、神様が死者の中からよみがえらされたお方です。主は、どういう人を高く上げ、どういう人を低くされますか？自分自身を誇る者、ここでの指導者たちのように自分を高くする者、自分を何者かのように考える人を主は低くされます。でも、ご自分の前に、自分のうちに汚れがあることを認め、救いの望みを主に置く人、つまり、自分自身を低くする人を、主は、高くされるのです。

でも私たちはみな、多かれ少なかれ、自分を高くする者ではないですか？外側の謙遜を装うことは上手でも、内側はいつも自分のことが中心で、プライドが傷つけられるなら、自分で復讐しようとする者ではないでしょうか？この指導者たちを見て、自分を彼らよりもマシな人間だと思おうのが、私たちだと思おうのです。それは自分の愚かさを知らないからですが、でもだからこそ、私たちには主イエスが必要、主のいうことばに日々聴くことが必要です。そして、主の御霊に満たされる必要があります。それが、弱さや欠けを持つ者にも関わらず、無学な、普通の人である私たちが神様の栄光を現すために、神様が与えて下さる力（デユナミス）だからです。主の前にへりくだり、主の力に満たされることで、主をあがめ、主を証しようではありませんか。